

研究主題	子どもの「やってみたい」があふれ 未来につながる幼児教育
研究の重点	幼児教育における今日的課題に応じた保育実践の充実 ～長時間保育における幼児期にふさわしい生活～
研究の視点	一人一人が1日を通して充実した園生活を送るために

～長時間保育における遊びの充実とは～

昨年度は、子どもたちの多様化する生活様式の中で「教育時間（9時～13時半）」以外の時間にも、子どもの思いや遊びが続いていくよう支えるためにはどのような援助や環境が必要かを考えてきました。その成果として、教育時間で積み重ねた経験が、保育時間や家庭での遊びにつながったり、じっくり遊びこむ経験が、自分で遊びを進めていく力につながったりすることが分かりました。

その成果をもとに今年度は「教育時間における様々な経験や遊びの充実が、教育時間外の遊びへの思いにつながるのではないか」という仮説を立て、「長時間保育における遊びの充実とはどういうことなのか」ということを事例をもとに考えていきたいと思います。

4歳児実践事例『好きなものでつながる思い、広がる遊び』

教育時間

ある日の園庭遊び中に、テントウムシを見つけました。子どもたちは、よく見かけるテントウムシとは違いそう...と気付きました。ちょうど入室しようとしたタイミングでの発見だったので、虫カゴに入れて部屋に連れて帰り、観察してみることにしました。

保育者の想像以上に熱心に図鑑と見比べて観察しており、調べていくうちにテントウムシに必要な餌や草などが分かってくると、子どもたちから「飼いたい」という声も上がり始めました。しかし、餌を用意する難しさが課題となり、クラスでテントウムシにとって一番よい方法を話し合った結果、その日の教育時間の終わり頃にみんなで外に返すことにしました。



《保育者の援助》

- ・子どもたちが虫探しに夢中になっている様子を見取り、この数日前に子どもたちに「春の図鑑」を下ろしていました。保育者はその図鑑にテントウムシのページがあることを思い出し、興味深くテントウムシを眺めていた子どもたちに図鑑でテントウムシの名前を調べてみることを提案しました。
- ・図鑑を使って調べるという経験はほぼ初めてだったので、色や大きさなど、見比べるポイントを知らせながら、一緒に観察を行いました。
- ・図鑑は同じ内容のものを数冊ずつ用意しました。そのため、個人、もしくは 2人の少人数で、それぞれのペースで観察できたことが「自分たちで調べた」という満足感につながったように感じます。
- ・いつもは入室のタイミングで保育者に言われるまま虫を逃がしていた子どもたちでしたが、自分たちでテントウムシについて考える時間をつくったことで、納得して自然に返すことができたのではないかと思います。

① 調べる楽しさ、知る面白さ



見つけた虫について調べ、図鑑にも載っていることを発見しました。



新しいことを知る面白さを実感

- ★調べることで知識が増えた。
- ★図鑑で見た知識を保育者や友達に伝えることが楽しかった。
- ★「わかった！」という達成感を味わえた。

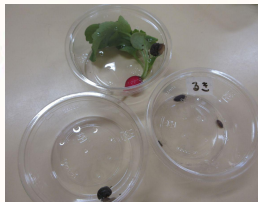
ポイント:「調べて分かる」経験を積み重ねたことで、「もっと知りたい」「伝えたい」という気持ちが高まりました。

② 観察カップ

当初はひとつの虫ごとで観察していました。



それぞれが見つけた虫をじっくり観察できるよう透明のカップを用意しました。



その結果…

自分が見つけた虫をさらに大切にする



自然に帰すタイミングを自分で考えられる

幼稚園児

自分の降園前に帰す



保育園児

夕方まで残して観察する



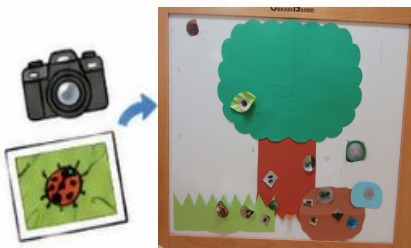
満足するまで観察することで興味が続いていきました



ポイント:自分の虫を自分のペースで観察できることで、愛着や探求心が深まりました。

③ 虫パネル

虫本体は残せなくても、写真で残し、見つけた場所ごとに分類できるパネルをつくりました。



室内にパネルがあることで…

いつでも図鑑を開いたり、「これは〇〇くんが捕まえた虫!」と思い出したりできる



そのときの出来事を振り返るきっかけになる



友達と一緒に遊ぶ中で、虫も仲間のような存在に



- ★虫も命のある生き物だと知る。
- ★大切にしようという気持ちが広がる。
- ★「連れてきた虫はその日のうちに帰す」という約束を、クラスで考えて決める。

夕方まで虫を残せるようにしたことで、夕方の園庭遊びの時間にも虫との触れ合いを楽しんだり、異年齢の友達に見せたりする姿が見られていました。また、夕方まで残すことで弱ってしまう虫もいることが分かり、その経験から観察のために部屋に連れて帰っても、短い時間で自然に帰そうとする姿もありました。夕方にも園庭での虫探しを楽しみ、「自分で見つけた虫を調べたいから図鑑がほしい」「観察したい」という発信が増えていきました。

また、異年齢で過ごす時間の中では、LaQやレゴで虫をつくったり、自分でつくることは難しい場合は年長児に手伝ってもらったりしながら、外に出られない時間も虫への思いをもって過ごしていたように感じます。



考察 まとめ

《やってみたい！の気持ちを受け止める》

- ・「虫と一緒にいたい」という気持ちを受け止め、虫と一緒に過ごすことを認めた保育者の援助が、子どもの 安心や意欲につながりました。

《教育時間での遊びの充実》

- ・それぞれの時間の中で楽しんでいた虫探しでしたが、教育時間の中で虫の命について考えた経験が、大切にしたいと思う気持ちや、虫のことについて 知りたいと思う探求心の芽生えにつながっていったのではないかと思います。

《保育時間につながる姿》

- ・図鑑やルーペなど、虫の観察に必要な道具の使い方を丁寧に知らせたことで使い方が分かり、新しい知識や発見を友達と共有する姿が見られていました。また、家の図鑑で見た知識や保護者から聞いたという話を友達や保育者に共有したり、外に出られない時間にもブロックで虫をつくったりと、個々が様々な時間に虫への思いをめぐらせて過ごしているのだと感じました。



事例検討を通しての 新たな視点と気づき

虫を持ち歩くなど、一見すると遊び込めていないように見える時間も、子どもたちにとっては必要な時間だったのではないか。

大切な虫と一緒にいること自体が子どもにとって意味のある時間になりました。

子どもたちは虫と一緒に過ごす中で、安心したり、喜んだり、考えたりしながら様々な気持ちを育んでいます。



一日を通して、全力で遊び続けることは不可能。空白の時間も必要である。



長時間にわたって常に全力で遊び続けられるわけではありません。時々立ち止まったり、ゆったり過ごしたりする時間も、長時間保育においては大切な時間になると気付きました。「遊び込む」「継続する」だけでなく、子どもたちが安心して思いを持ち続けられる時間や、一見すると空白に見える時間も含めて、その子らしく過ごせる環境を保障していきます。